

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

ケミカルバイオロジーによるアルツハイマー病 病態解明と治療薬開発

分子基盤研究部 認知症病態解析室

福森 亮雄 室長

平成31年1月10日(木) 16時00分～

第1研究棟2階大会議室

認知症、特に患者数の多いアルツハイマー病(AD)の対策が急務である。現在、AD患者の脳に蓄積するアミロイド β 蛋白(A β)を除去するA β 抗体療法がフェーズIII治験中であり、その成功が期待されている。我々はポストA β 抗体療法を考え、より詳細な病態解明、バイオマーカー探索、治療薬開発を行っている。そのための我々独自の基盤技術として、部位特異的光親和性クロスリンク法を開発してきた。この手法ではアミノ酸レベルでの結合分子を明らかにすることができ、まず、これまでにA β 産生酵素は γ セクレターゼの基質結合部位を明らかにしてきた。さらに我々は部位特異的光親和性クロスリンク法をさらに応用・発展させ、ADの病態に関する新規分子の探索を試みている。

本報告会では、特に、我々が同定した基質結合部位での基質認識メカニズムのデータを中心に、部位特異的光親和性クロスリンク法を応用する今後の研究計画を紹介、討議したい。